

Jリーグパートナー

■ Jリーグタイトルパートナー
明治安田生命保険相互会社

■ Jリーグオフィシャルブロードキャスティングパートナー
DAZN Japan Investment 合同会社

■ Jリーグトップパートナー
株式会社アイデム
ルートインジャパン株式会社
イオンリテール株式会社
Electronic Arts Inc.
株式会社NTTドコモ
株式会社コナミデジタルエンタテインメント
いちご株式会社

■ Jリーグ百年構想パートナー
朝日新聞社

■ リーグカップパートナー
ヤマザキビスケット株式会社

■ スーパーカップパートナー
富士フイルムビジネスソリューション株式会社

■ Jリーグオフィシャルエキップメントパートナー
アディダス ジャパン株式会社 / 株式会社モルテン

■ スポーツ振興パートナー
独立行政法人日本スポーツ振興センター

■ Jリーグオフィシャルチケットングパートナー
ぴあ株式会社

■ JリーグオフィシャルECプラットフォームパートナー
楽天グループ株式会社

■ Jリーグオフィシャルテクノロジーパートナー
NTTグループ

■ Jリーグサポーティングカンパニー
ヤフー株式会社
デロイト トーマツ ファイナンシャルアドバイザー 合同会社 /
デロイト トーマツ コンサルティング 合同会社
データスタジアム株式会社
株式会社IMAGICA GROUP / 株式会社イマジカ・ライブ
LINE株式会社
サントリーウエルネス株式会社
TikTok Japan

*2022年5月1日現在

スポーツで、もっと、幸せな国へ。 Jリーグ百年構想



2022 J.LEAGUE™



公益社団法人日本プロサッカーリーグ
www.jleague.jp/

©J.LEAGUE

Jリーグ理念

- 一、日本サッカーの水準向上及びサッカーの普及促進
- 一、豊かなスポーツ文化の振興及び国民の心身の健全な発達への寄与
- 一、国際社会における交流及び親善への貢献



ご挨拶

第6代Jリーグチェアマンとして、今年3月15日に村井 満 前チェアマンよりバトンを受け継ぎました。私はJリーグの選手として、またクラブ経営者として、サッカー、そしてJリーグに育てていただきました。これから新たな立場でJリーグに携われることを嬉しく思うとともに、その責任の重さを感じています。

私は、サッカーは「作品」だと考えています。素晴らしいプレー、スタジアムの雰囲気、勝敗や心動かされるプレーから湧き上がる感情。これら全てが作品を彩る要素となり、ピッチ上の選手のみならず、ファン・サポーター、地域の方々、支えてくださるステークホルダーの皆様、多くのスタッフとともに創り上げられるものだと考えています。

一昨年より新型コロナウイルスの感染が拡大し、今なお多くの方が困難な状況にある中、Jリーグも様々な制約の下で日々を過ごし、それにもかかわらず年間1,000試合以上を開催することが

できました。1993年のJリーグ開幕から30回目となる今シーズンも、新たにいわきFCを仲間を迎えたJ1、J2、J3全58クラブが、多くの方々のご支援をいただきながら全国各地でのしを削り、熱い戦いを繰り広げています。

30年の間にJリーグはサッカーに関わる人たちだけのものではなく、ホームタウンの皆様をはじめとする多くの方々に愛される存在になりました。スポーツが文化として社会に根付く一翼を担い、社会課題を解決する社会連携のハブとなるまでに成長しつつあります。

コロナ禍において試合を続けることができたのは、ひとえにサッカーという作品を間近に見てほしい、スポーツという文化を止めてはいけないという多くの方々の想いがあったからです。Jリーグが目指す「スポーツでもっと幸せな国」を実現するためにも、原点であるサッカーという作品がより魅力的でなければならぬと改めて感じています。

現在、国内のみならず海外でもJリーグを愛し、支えてくださる「仲間」が広がっています。今シーズン終了後、サッカー日本代表がFIFAワールドカップカタール2022に出場し、Jリーグで育ち、活躍した選手たちが世界を相手に戦います。より魅力的なJリーグになるためには、今後も世界の舞台で活躍できる選手を輩出し続け、世界のトップリーグに引けを取らないリーグとなることは必至となります。

ピッチの中においても、それを取り巻く環境においても、多くの方々と手を携えながら世界に伍するリーグを目指し、より素晴らしい「作品」を皆様と共に創造するべく、その責任を果たしていく所存です。

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ

チェアマン 野々村 芳和



チェアマン／野々村 芳和（ののむら よしかづ）
1972年（昭和47年）5月8日 生まれ
静岡県清水市（旧清水市、現在は静岡市清水区）出身

【学歴】
1995年3月慶應義塾大学法学部法律学科 卒業
【職歴】
1995年ジェフユナイテッド市原（現 ジェフユナイテッド千葉）選手加入
2000年同クラブから移籍
2000年コンサドーレ札幌（現 北海道コンサドーレ札幌）選手加入
2001年同クラブ 選手引退、チームアドバイザー就任
2006年株式会社クラッキ 代表取締役社長
2013年株式会社クラッキ 代表取締役社長 退任
2013年株式会社北海道フットボールクラブ（現 株式会社コンサドーレ）代表取締役社長
2015年公益社団法人日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）理事（非常勤）
2022年株式会社コンサドーレ 代表取締役会長
2022年3月同社会長 退任
公益社団法人日本プロサッカーリーグチェアマン（理事長）（現任）
公益財団法人日本サッカー協会（JFA）副会長（非常勤）

J1：118出場／6得点 リーグカップ戦：30出場／1得点 J2：36出場／2得点



4 |

Jクラブについて

■2022 Jリーグ クラブ編成

J1

- 北海道コンサドーレ札幌
- 鹿島アントラーズ
- 浦和レッズ
- 柏レイソル
- FC東京
- 川崎フロンターレ
- 横浜F・マリノス
- 湘南ベルマーレ
- 清水エスパルス
- ジュビロ磐田★
- 名古屋グランパス
- 京都サンガF.C.★
- ガンバ大阪
- セレッソ大阪
- ヴィッセル神戸
- サンフレッチェ広島
- アビスパ福岡
- サガン鳥栖

J2

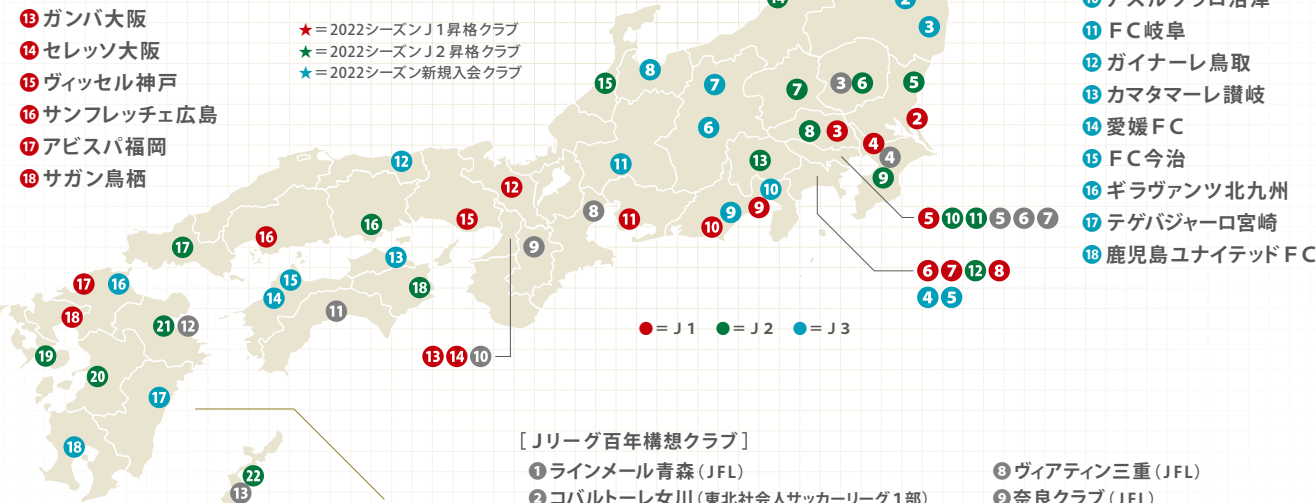
- いわてグルージャ盛岡★
- ベガルタ仙台
- ブラウブリッツ秋田
- モンテディオ山形
- 水戸ホーリーホック
- 栃木SC
- ザスパクサツ群馬
- 大宮アルディージャ
- ジェフユナイテッド千葉
- 東京ヴェルディ
- FC町田ゼルビア
- 横浜FC

★ = 2022シーズンJ1昇格クラブ
★ = 2022シーズンJ2昇格クラブ
★ = 2022シーズン新規入会クラブ

- ヴァンフォーレ甲府
- アルビレックス新潟
- ツエーゲン金沢
- ファジアーノ岡山
- レノファ山口FC
- 徳島ヴォルティス
- V・ファーレン長崎
- ロアッソ熊本★
- 大分トリニータ
- FC琉球

J3

- ヴァンラーレ八戸
- 福島ユナイテッドFC
- いわきFC★
- Y. S. C. C. 横浜
- SC相模原
- 松本山雅FC
- AC長野パルセイロ
- カターレ富山
- 藤枝MYFC
- アスルクラロ沼津
- FC岐阜
- ガイナレ鳥取
- カマタマーレ讃岐
- 愛媛FC
- FC今治
- ギラヴァンツ北九州
- テゲバジャーロ宮崎
- 鹿児島ユナイテッドFC



【Jリーグ百年構想クラブ】

- ラインメール青森 (JFL)
- コバルトレ女川 (東北社会人サッカーリーグ1部)
- 栃木シティフットボールクラブ (関東サッカーリーグ1部)
- VONDS市原 (関東サッカーリーグ1部)
- 南葛SC (関東サッカーリーグ1部)
- クリアソン新宿 (JFL)
- 東京23FC (関東サッカーリーグ1部)

- ヴィアティン三重 (JFL)
- 奈良クラブ (JFL)
- FC大阪 (JFL)
- 高知ユナイテッドSC (JFL)
- ヴェルスバ大分 (JFL)
- 沖縄SV (九州サッカーリーグ)

※鈴鹿ポイントゲッターズ (JFL) は解除条件付き資格停止中

※2022年4月26日現在

J 1	法人名	代表者	ホームタウン	活動区域	ホームスタジアム
北海道コンサドーレ札幌	㈱コンサドーレ	代表取締役GM 三上 大勝	札幌市を中心とする北海道	北海道	札幌ドーム
鹿島アントラーズ	㈱鹿島アントラーズ・エフ・シー	代表取締役社長 小泉 文明	鹿嶋市、潮来市、神栖市、行方市、鉾田市	茨城県	県立カシマサッカースタジアム
浦和レッズ	浦和レッドダイヤモンズ㈱	代表取締役社長 立花 洋一	さいたま市	埼玉県	埼玉スタジアム2002
柏レイソル	㈱日立柏レイソル	代表取締役社長 瀧川 龍一郎	柏市	千葉県	三協フロンテア柏スタジアム
FC東京	東京フットボールクラブ㈱	代表取締役社長 川岸 滋也	東京都	東京都	味の素スタジアム
川崎フロンターレ	㈱川崎フロンターレ	代表取締役社長 吉田 明宏	川崎市	神奈川県	等々力陸上競技場
横浜F・マリノス	横浜マリノス㈱	代表取締役社長 黒澤 良二	横浜市、横須賀市、大和市	神奈川県	日産スタジアム
湘南ベルマーレ	㈱湘南ベルマーレ	代表取締役社長 水谷 尚人	厚木市、伊勢原市、小田原市、茅ヶ崎市、秦野市、平塚市、藤沢市、大磯町、寒川町、二宮町、鎌倉市、南足柄市、大井町、開成町、中井町、箱根町、松田町、真鶴町、山北町、湯河原町	神奈川県	レモンガススタジアム平塚
清水エスパルス	㈱エスパルス	代表取締役社長 山室 晋也	静岡市	静岡県	ＩＡＩスタジアム日本平
ジュビロ磐田	㈱ジュビロ	代表取締役社長 小野 勝	磐田市	静岡県	ヤマハスタジアム(磐田)
名古屋グランパス	㈱名古屋グランパスエイト	代表取締役社長 小西 工己	名古屋市、豊田市、みよし市を中心とする全県	愛知県	豊田スタジアム
京都サンガF.C.	㈱京都パープルサンガ	代表取締役社長 伊藤 雅章	京都市、宇治市、城陽市、向日市、長岡京市、京田辺市、木津川市、亀岡市、南丹市、京丹波町、福知山市、舞鶴市、綾部市、八幡市、宮津市	京都府	サンガスタジアム by KYOCERA
ガンバ大阪	㈱ガンバ大阪	代表取締役社長 小野 忠史	吹田市、茨木市、高槻市、豊中市、池田市、摂津市、箕面市	大阪府	パナソニック スタジアム 吹田
セレッソ大阪	㈱セレッソ大阪	代表取締役社長 森島 寛晃	大阪市、堺市	大阪府	ヨドコウ桜スタジアム
ヴィッセル神戸	楽天ヴィッセル神戸㈱	代表取締役社長 徳山 大樹	神戸市	兵庫県	ノエビアスタジアム神戸
サンフレッチェ広島	㈱サンフレッチェ広島	代表取締役社長 仙田 信吾	広島市	広島県	エディオンスタジアム広島
アビスパ福岡	代表取締役社長 川森 敬史		福岡市	福岡県	ベスト電器スタジアム
サガン鳥栖	㈱サガン・ドリームス	代表取締役 福岡 淳二郎	鳥栖市	佐賀県	駅前不動産スタジアム

J 2	法人名	代表者	ホームタウン	活動区域	ホームスタジアム
いわてグルージャ盛岡	㈱いわてアスリートクラブ	代表取締役社長 坂本 達朗	盛岡市、宮古市、大船渡市、花巻市、北上市、久慈市、遠野市、一関市、陸前高田市、金石市、二戸市、八幡平市、奥州市、滝沢市、雫石町、葛巻町、岩手町、紫波町、矢巾町、西和賀町、金ケ崎町、平泉町、住田町、大槌町、山田町、岩泉町、田野畑村、普代村、軽米町、野田村、九戸村、洋野町、一戸町【岩手県全県】	岩手県	いわぎんスタジアム
ベガルタ仙台	㈱ベガルタ仙台	代表取締役社長 佐々木 知廣	仙台市を中心とする全県	宮城県	ユアテックスタジアム仙台
ブラウブリッツ秋田	㈱ブラウブリッツ秋田	代表取締役社長 岩瀬 浩介	秋田市、由利本荘市、にかほ市、男鹿市、湯上市を中心とする全県	秋田県	ソユーススタジアム
モンテディオ山形	㈱モンテディオ山形	代表取締役社長 相田 健太郎	山形市、天童市、鶴岡市を中心とする全県	山形県	N Dソフトスタジアム山形
水戸ホーリーホック	㈱フットボールクラブ水戸ホーリーホック	代表取締役社長 小島 耕	水戸市、ひたちなか市、笠間市、那珂市、小美玉市、茨城町、城里町、大洗町、東海村	茨城県	ケーズデンキスタジアム水戸
栃木SC	㈱栃木サッカークラブ	代表取締役社長 橋本 大輔	宇都宮市	栃木県	栃木県グリーンスタジアム
ザスパクサツ群馬	㈱ザスパ	代表取締役社長 石井 宏司	草津町、前橋市を中心とする全県	群馬県	正田醤油スタジアム群馬
大宮アルディージャ	エヌ・ティ・ティ・スポーツコミュニティ㈱	代表取締役社長 佐野 秀彦	さいたま市	埼玉県	N A C K 5スタジアム大宮
ジェフユナイテッド千葉	ジェフユナイテッド㈱	代表取締役社長 森本 航	市原市、千葉市	千葉県	フクダ電子アリーナ
東京ヴェルディ	東京ヴェルディ㈱	代表取締役代行 森本 譲二	東京都	東京都	味の素スタジアム
FC町田ゼルビア	㈱ゼルビア	代表取締役社長 大友 健寿	町田市	東京都	町田G I O Nスタジアム
横浜FC	㈱横浜フリエスポーツクラブ	代表取締役社長兼COO 木村 遼	横浜市	神奈川県	ニッパツ三ツ沢球技場
ヴァンフォーレ甲府	㈱ヴァンフォーレ山梨スポーツクラブ	代表取締役社長 佐久間 悟	甲府市、韮崎市を中心とする全県 大町市、池田町、生坂村、箕輪町、朝日村	山梨県	J I T リサイクルリンク スタジアム※
アルビレックス新潟	㈱アルビレックス新潟	代表取締役社長 中野 幸夫	新潟市、聖籠町、長岡市、三条市、柏崎市、新発田市、小千谷市、加茂市、十日町市、見附市、村上市、燕市、糸魚川市、妙高市、五泉市、上越市、阿賀野市、佐渡市、魚沼市、南魚沼市、胎内市、弥彦村、田上町、阿賀町、出雲崎町、湯沢町、津南町、刈羽村、関川村、粟島浦村	新潟県	デンカビッグスワンスタジアム
ツエーゲン金沢	㈱石川ツエーゲン	代表取締役GM 西川 圭史	金沢市、野々市市、かほく市、津幡町、内灘町を中心とする全県	石川県	石川県西部緑地公園陸上競技場
ファジアーノ岡山	㈱ファジアーノ岡山スポーツクラブ	代表取締役GM 鈴木 徳彦	岡山市、倉敷市、津山市を中心とする全県	岡山県	シティライトスタジアム
レノファ山口FC	㈱レノファ山口	代表取締役社長 小山 文彦	山口市、下関市、山陽小野田市、宇布市、防府市、周南市、美祢市、萩市、下松市、岩国市、光市、長門市、柳井市、周防大島町、和木町、上関町、田布施町、平生町、阿武町【山口県全県】	山口県	維新みらいふスタジアム
徳島ヴォルティス	徳島ヴォルティス㈱	代表取締役社長 岸田 一宏	鳴門市、徳島市、吉野川市、美馬市、小松島市、板野町、松茂町、藍住町、北島町を中心とする全県	徳島県	鳴門・大塚スポーツパークポカリスエットスタジアム
V・ファーレン長崎	㈱V・ファーレン長崎	代表取締役ホームタウン担当役員 由井 昌秋	長崎市、諫早市を中心とする全県	長崎県	トランスコスモススタジアム長崎
ロアッソ熊本	㈱アスリートクラブ熊本	代表取締役社長 永田 求	熊本市	熊本県	えがお健康スタジアム
大分トリニータ	㈱大分フットボールクラブ	代表取締役 榎 徹	大分市、別府市、佐伯市を中心とする全県	大分県	昭和電工ドーム大分
FC琉球	琉球フットボールクラブ㈱	代表取締役会長 倉林 啓士郎	沖縄市を中心とする全県	沖縄県	タビック県総ひやごんスタジアム

J 3	法人名	代表者	ホームタウン	活動区域	ホームスタジアム
ヴァンラーレ八戸	㈱ヴァンラーレ八戸	代表取締役社長 下平 賢吾	八戸市、十和田市、五戸町、三戸町、田子町、南部町、おいらせ町、階上町、新郷村、三沢市、七戸町、六戸町、東北町、野辺地町、横浜町、六ヶ所村	青森県	プライフーズスタジアム
福島ユナイテッドFC	㈱AC福島ユナイテッド	代表取締役 鈴木 勇人	福島市、会津若松市、伊達市、国見町、桑折町、川俣町を中心とする全県	福島県	とうほう・みんなのスタジアム
いわきFC	㈱いわきスポーツクラブ	代表取締役 大倉 智	いわき市、広野町、楮葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、葛尾村	福島県	Jヴィレッジスタジアム
Y. S. C. C. 横浜	㈱株式会社Y. S. C. C.	代表取締役社長 吉野 次郎	横浜市	神奈川県	ニッパツ三ツ沢球技場
SC相模原	㈱スポーツクラブ相模原	代表取締役会長 望月 重良	相模原市、海老名市、座間市、綾瀬市、愛川町	神奈川県	相模原ギオンスタジアム
松本山雅FC	㈱松本山雅	代表取締役 神田 文之	松本市、塩尻市、山形村、安曇野市、千曲市、坂城町、小布施町、高山村、山ノ内町、木島平村、野沢温泉村、信濃町、飯綱町、小川村、栄村、佐久市	長野県	サンプロ アルウィン
AC長野パルセイロ	㈱長野パルセイロ・アスレチッククラブ	代表取締役社長 町田 善行	長野市、須坂市、中野市、飯山市、高山村、坂城町、小布施町、高山村、山ノ内町、木島平村、野沢温泉村、信濃町、飯綱町、小川村、栄村、佐久市	長野県	長野Vスタジアム
カターレ富山	㈱カターレ富山	代表取締役社長 左伴 繁雄	富山市を中心とする全県	富山県	富山県総合運動公園陸上競技場
藤枝MYFC	㈱藤枝MYFC	代表取締役 徳田 航介	藤枝市、焼津市、島田市、牧之原市、吉田町、川根本町	静岡県	藤枝総合運動公園サッカー場
アスルクラロ沼津	アスルクラロスルガ㈱	代表取締役 渡邊 隆司	沼津市	静岡県	愛鷹広域公園多目的競技場
FC岐阜	岐阜卓フットボールクラブ	代表取締役社長 小松 裕志	岐阜市を中心とする全県	岐阜県	岐阜メモリアルセンター長良川競技場
ガイナレ鳥取	㈱SC鳥取	代表取締役社長 塚野 真樹	鳥取市、米子市、倉吉市、境港市を中心とする全県	鳥取県	A x i s バードスタジアム
カマタマーレ讃岐	㈱カマタマーレ讃岐	代表取締役社長 池内 秀樹	高松市、丸亀市を中心とする全県	香川県	P i k a r aスタジアム
愛媛FC	㈱愛媛F C	代表取締役社長 村上 忠	松山市を中心とする全県	愛媛県	ニンジニアスタジアム
FC今治	㈱今治 夢スポーツ	代表取締役社長 矢野 将文	愛媛県今治市	愛媛県	ありがとうサービス 夢スタジアム
ギラヴァンツ北九州	㈱ギラヴァンツ北九州	代表取締役社長 玉井 行人	北九州市	福岡県	ミクニワールドスタジアム北九州
テゲバジャーロ宮崎	㈱テゲバジャーロ宮崎	代表取締役社長 二村 恵太	宮崎市、新富町、西都市	宮崎県	ユニリーバスタジアム新富
鹿児島ユナイテッドFC	㈱鹿児島プロスポーツプロジェクト	代表取締役 徳重 剛	鹿児島市	鹿児島県	白波スタジアム

※：2021年3月1日より、山梨中銀スタジアムから変更

※2022年4月26日現在

Jリーグについて

Jリーグは、日本サッカーのレベルアップを目的に1991年11月1日に創設されました。

Jリーグは、充実したスポーツ施設と選手の育成強化システムを構築しながら、日本サッカーのレベルアップを目指すとともに、スポーツ文化を醸成し、多くの人々がスポーツを楽しめる場を全国各地につくっていききたいという理念を掲げています。

Jリーグのクラブがスポーツを通じた地域活性の核となり、理念を具現化する活動の拠点とするために「ホームタウン」という概念を初めて取り入れたプロスポーツとして、Jリーグは1993年5月15日に開幕し、2022年は記念すべき30回目のシーズンとなります。

理念に賛同したクラブは開幕以降徐々に増え、10クラブで開幕したJリーグは1999年にJ2を創設、2014年にJ3を創設し、現在はJ1・J2・J3合わせて58クラブが全国40都道府県に広がっています。

Jリーグは、プロスポーツとしてエンターテインメントを提供する一方で、誰もがいつでも気軽にスポーツを楽しめる環境づくりを目指し、Jクラブと協力して社会と連携していく活動を推進しています。

Jリーグの原点である「熱狂のスタジアム」の創造を中心に、豊かで充実したスポーツ環境を実現するためのプラン、取り組み、活動の総称として「Jリーグ百年構想」というスローガンを掲げて理念の推進に取り組んでいます。

■設立趣旨

- 1. 「スポーツ文化」としてのサッカーの振興** 日本のサッカーをより広く愛されるスポーツとして普及させることにより、国民の心身の健全な発達を図るとともに、豊かなスポーツ文化を醸成。わが国の国際社会における交流・親善に寄与する。
- 2. 日本サッカーの強化と発展** 日本のサッカーを活性化し、オリンピック、ワールドカップに常時出場できるレベルにまで実力を高め、日本におけるサッカーのステイタスを向上させる。
- 3. 選手・指導者の地位の向上** トップレベルの選手・指導者に、やりがいのある場を提供し、その社会的地位を高めていく。
- 4. 競技場をはじめとするホームタウン環境の整備** 地域に深く根ざすホームタウン制を基本とし、各地域において地元住民が心ゆくまでトップレベルのサッカーとふれあえるよう、スタジアム施設をはじめチーム周辺を整備する。

■事業内容

- プロサッカーの試合の主催および公式記録の作成
- プロサッカーに関する諸規約の制定
- プロサッカーの選手、監督および審判等の養成、資格認定および登録
- プロサッカーの試合の施設の検定および用具の認定
- 放送等を通じたプロサッカーに関する広報普及
- サッカーおよびサッカー技術に関する調査、研究および指導
- プロサッカーの選手、監督および関係者の福利厚生事業の実施
- サッカーに関する国際的な交流および事業の実施
- サッカーをはじめとするスポーツの振興および援助
- サッカーをはじめとするスポーツの経営人材の養成および活用
- プロサッカーの安定的な試合開催を目的とした、クラブの経営維持のための一時的な融資および経営指導
- サッカーをはじめとするスポーツに関する映像等の制作および活用
- サッカーをはじめとするスポーツに関する商品等の企画、製作および販売
- その他目的を達成するために必要な事業

■Jリーグの組織

Jリーグの理事会は、総会で選出された理事と監事で構成され、Jリーグの目的と方針を決定する意思決定機関です。

理事会の下には、実行委員会が設置されています。日々起こりうる現実的な課題への対応や、経営方針に基づき実施する個別施策を審議する機関です。実行委員会は、チェアマン、担当理事および各クラブから選出された1人の代表で構成されています。

■理事、監事、特任理事

役 職	氏 名	所 属
※ チェアマン(常勤) (旧理事(非常勤))	野々村 芳和 ののむら よしかづ	公益社団法人 日本プロサッカーリーグ
理 事(常勤)	窪田 慎二 くぼた しんじ	公益社団法人 日本プロサッカーリーグ
※ 理 事(常勤)	高田 春奈 たかた はるな	公益社団法人 日本プロサッカーリーグ
※ 理 事(常勤)	並木 裕太 なみき ゆうた	公益社団法人 日本プロサッカーリーグ
※ 理 事(常勤)	馬場 浩史 ばば ひろし	公益社団法人 日本プロサッカーリーグ
※ 理 事(非常勤)	大倉 智 おおくら さとし	株式会社いわきスポーツクラブ 代表取締役社長
※ 理 事(非常勤)	小泉 文明 こいずみ ふみあき	株式会社鹿島アントラース・エフ・シー 代表取締役社長 株式会社メルカリ 取締役会長
※ 理 事(非常勤)	水谷 尚人 みずたに なおひと	株式会社湘南ベルマーレ 代表取締役社長
※ 理 事(非常勤)	森島 寛晃 もりしま ひろあき	株式会社セレッソ大阪 代表取締役社長
※ 理 事(非常勤)	杉本 勇次 すぎもと ゆうじ	ベインキャピタル・ブライバート・エクイティ・ジャパンLLC日本代表
理 事(非常勤)	立石 敬之 たていし たかゆき	シント＝トロイデン CEO
※ 理 事(非常勤)	辻井 隆行 つじい たかゆき	ソーシャルビジネス・コンサルタント
理 事(非常勤)	馬場 渉 ばば わたる	パナソニック株式会社 参与
※ 理 事(非常勤)	平野 拓也 ひらの たくや	Microsoft Corporation Vice President Global Service Partners
※ 理 事(非常勤)	宮本 恒靖 みやもと つねやす	プロサッカー指導者
理 事(非常勤)	反町 康治 そりまち やすはる	公益財団法人日本サッカー協会 理事 技術委員会 委員長
※ 監 事(常勤)	鈴木 秀和 すずき ひでかず	公益社団法人 日本プロサッカーリーグ
※ 監 事(非常勤) (旧理事(非常勤))	榎 徹 えのき とおる	株式会社大分フットボールクラブ 代表取締役
※ 監 事(非常勤)	小林 久美 こばやし くみ	Tokyo Athletes Office 株式会社 代表取締役 株式会社スパカチ 取締役 株式会社コーセー 社外監査役
※ 特任理事(非常勤)	内田 篤人 うちだ あつと	公益財団法人日本サッカー協会 ロールモデルコーチ シャルケ 04 チームアンバサダー
※ 特任理事(非常勤)	中村 憲剛 なかむら けんご	Frontale Relations Organize 公益財団法人日本サッカー協会 ロールモデルコーチ JFA Growth Strategist
特任理事(非常勤)	夫馬 賢治 ふま けんじ	株式会社ニユーラル 代表取締役CEO

■常勤理事紹介



窪田 慎二 【くぼた しんじ】
1969年(昭和44年)6月6日生まれ／
埼玉県浦和市(現さいたま市)出身
1992年3月東京学芸大学教育学部 卒業
1992年4月コスモ石油株式会社 入社。1997年4月社団法人日本プロサッカーリーグ 入社、運営部に配属。運営部、事業部等を経て、フットボール統括本部 本部長 兼 競技・運営部 部長、強化・育成部 部長、株式会社Jリーグマーケティング 代表取締役社長 執行役員等を歴任。2020年公益社団法人日本プロサッカーリーグ 理事に就任。



並木 裕太 【なみき ゆうた】
1977年(昭和52年)6月29日 生まれ／ベルギー ブリュッセル 出身
2000年慶應義塾大学経済学部 卒業。2006年5月ベンシルバニア大学ウォートン校にてMBA取得。マッキンゼーアンドカンパニーを経て、2009年株式会社フィールドマネジメント設立、代表取締役に就任。
2015年株式会社湘南ベルマーレ取締役、2016年公益社団法人日本プロサッカーリーグ理事、2020年株式会社Jリーグ社外取締役、株式会社湘南ベルマーレ取締役(再任)を務める。



高田 春奈 【たかた はるな】
1977年(昭和52年)5月17日 生まれ／長崎県佐世保市 出身
2001年3月国際基督教大学教養学部 卒業／2018年3月東京大学大学院教育学研究科 修士課程修了。
2001年4月ソニー株式会社入社。株式会社エスプリングホールディングス代表取締役、株式会社ジャパネットホールディングス 取締役等を経て、2020年1月株式会社V・ファアレン長崎代表取締役社長に就任し、実行委員を務める。



馬場 浩史 【ばば ひろし】
1968年(昭和43年)6月26日 生まれ／東京都中央区 出身
1992年3月東京大学法学部 卒業。2001年6月ワシントン大学にてMBA取得。
1992年4月日本電信電話株式会社入社。2010年7月NTTインベストメント・パートナーズ株式会社(現 株式会社NTTドコモ・ベンチャーズ) 担当部長、2015年8月株式会社NTTドコモ スマートライフ推進部 担当部長、2018年7月株式会社NTTドコモ スポーツ&ライブビジネス推進室長



後列(左から)
鈴木 秀和 監事 / 辻井 隆行 理事 / 馬場 渉 理事
内田 篤人 特任理事 / 夫馬 賢治 特任理事

中列(左から)
大倉 智 理事 / 小泉 文明 理事 / 水谷 尚人 理事 / 森島 寛晃 理事

前列(左から)
窪田 慎二 理事 / 高田 春奈 理事 / 野々村 芳和 チェアマン
並木 裕太 理事 / 馬場 浩史 理事

※印＝新任、役職変更
・任期は2022年3月15日より2024年3月に開催予定の定時社員総会終結の時までの2年間(定款第25条(役員の任期)：選任後2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時社員総会の終結の時まで)
・役員は、就任する年の4月1日現在で、満65歳未満でなければならない

Jリーグについて

■法人組織

Jリーグの総会、理事会および各委員会の事務処理をし、チェアマンの職務を補佐するとともに、Jリーグの活動に関する諸事項の企画・立案を行っています。



株式会社 Jリーグ
※ゲーム仲介監修事業、経営指導業務、新規事業開発等
株式会社ジェイ・セイフティ
※Jクラブの監督、コーチ、選手および審判員の損害保険、観客の安全対策に関する保険代行業務

■事業構造

Jリーグは、プロサッカーの試合を主催することで生じる公衆送信権、商品化権などの権利を一元管理し、それぞれの権利から得られる収入や、Jリーグのスポンサー・パートナー企業からの協賛金を、Jリーグの各種事業の費用およびJクラブへの配分金としています。

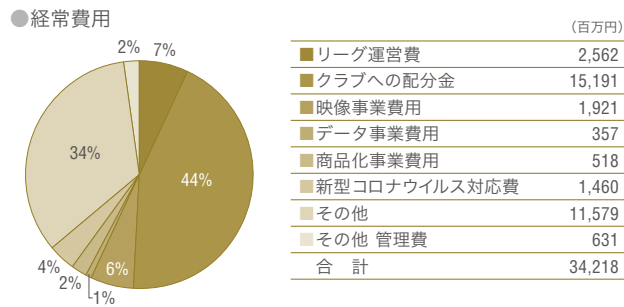
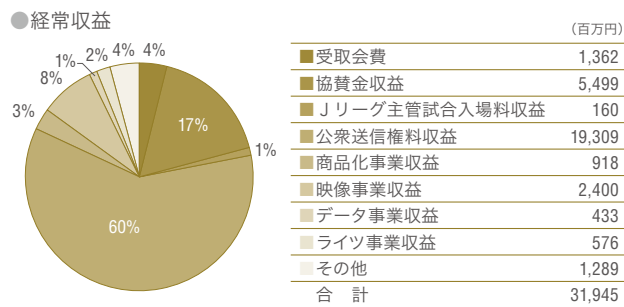


■事業予算について

Jリーグの収入は、公衆送信権料収入、協賛金収入、Jリーグ主管試合の入場料収入、Jクラブからの年会費・入会金、商品化権料などで構成されています。そのうちの約7割の約200億円が公衆送信権料収入となります。

主な支出はリーグ運営費とクラブへの配分金となり、前年度のリーグ戦順位や、集客の貢献度などに応じて、クラブへの配分金額が異なります。

2020年以降、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、依然厳しい経済状況が続いています。各種イベント開催、入場者数制限およびそれに伴う各種売り上げの減少、感染症対策に伴う支出の増加など、Jリーグのみならずスポーツ界、エンターテインメント産業には多大な影響があります。2022年度のJリーグの予算策定方針は、本格的にコロナ禍が明けた場合に備えた機動的な財政出動も含め、リバイバルに向けた戦略的な考え方を留保しつつも、リスクヘッジという考え方に基づいてサバイバルモードを継続し緊縮予算を設定しています。

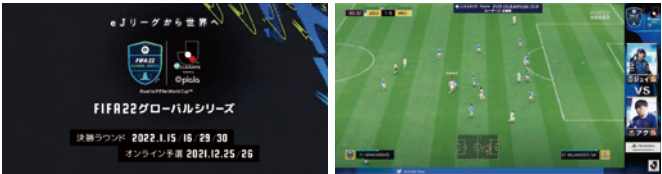


Jリーグは、リーグが得た収入を投資し、プロサッカーリーグの運営だけでなく選手育成、人材養成、公式映像の制作、地域スポーツ振興や社会連携活動、リーグ全体のCRMやファン開拓、エンターテインメントコンテンツの制作などを行っています。

■2022年度の事業スケジュール (スケジュールは変更になる場合があります)

月	大会	事業スケジュール
1月	●FIFA 22 グローバルシリーズ e Jリーグ Powered by plala ●2022FIFAワールドカップ カタール最終予選	●実行委員会、臨時実行委員会 ●理事会 ●役員候補者選考委員会 ●NPB・Jリーグ連絡会議(2回)
2月	●2/12(出): FUJIFILM SUPER CUP ●2/18(金)、19(土): 明治安田生命 Jリーグ開幕 (J1、J2) ●2/23(水・祝): JリーグYBCルヴァンカップ開幕 ●2022FIFAワールドカップ カタール最終予選	●新人研修会 ●NPB・Jリーグ連絡会議(2回) ●実行委員会、臨時実行委員会 ●理事会
3月	●3/12(出): 明治安田生命 J3リーグ開幕 ●Jエリートリーグ開始 ●AFCチャンピオンズリーグ (ACL) プレーオフ ●2022FIFAワールドカップ カタール最終予選 ●3/21(月): J ユースリーグ開幕	●Jエリートリーグ開幕 ●Jユースリーグ開幕 ●NPB・Jリーグ連絡会議(2回) ●実行委員会、臨時実行委員会 ●理事会 ●社員総会(役員改選)
4月	●ACLグループステージ	●NPB・Jリーグ連絡会議(2回) ●実行委員会 ●理事会
5月	●JリーグYBCルヴァンカップ グループステージ終了 ●天皇杯(1回戦)	●シャレン! アウォーズ ●5/15(日): Jリーグの日 ●クラブ経営情報開示(速報) ●NPB・Jリーグ連絡会議(2回) ●実行委員会 ●理事会
6月	●JリーグYBCルヴァンカップ プレーオフステージ ●天皇杯(2回戦、3回戦)	●NPB・Jリーグ連絡会議(2回) ●実行委員会 ●理事会 ●6月末: クラブライセンス 申請締め切り
7月	●天皇杯(ラウンド16) ●EAFF E-1サッカー選手権2022	●NPB・Jリーグ連絡会議(2回) ●実行委員会 ●理事会 ●クラブ経営情報開示(最終)
8月	●JリーグYBCルヴァンカップ プライムステージ(準々決勝) ●ACL(ラウンド16) ●ACL(準々決勝、準決勝)	●NPB・Jリーグ連絡会議(2回) ●実行委員会 ●理事会
9月	●JリーグYBCルヴァンカップ プライムステージ(準決勝) ●天皇杯(準々決勝)	●NPB・Jリーグ連絡会議(2回) ●実行委員会 ●理事会 ●9月末: クラブライセンス交付
10月	●JリーグYBCルヴァンカップ プライムステージ(決勝) ●明治安田生命 J2リーグ開幕 ●天皇杯(準決勝、決勝) ●J1参入プレーオフ(1回戦)	●NPB・Jリーグ連絡会議(2回) ●実行委員会 ●理事会
11月	●明治安田生命 J1リーグ、 J3リーグ開幕 ●J1参入プレーオフ(2回戦、決定戦) ●Jリーグアウォーズ ●FIFAワールドカップ	●NPB・Jリーグ連絡会議(2回) ●実行委員会 ●理事会
12月	●FIFAワールドカップ ●Jエリートリーグ開幕 ●Jユースリーグ開幕	●NPB・Jリーグ 連絡会議(2回) 予定 ●実行委員会 ●理事会 ●社員総会

※ACL決勝は2023年2月



FIFA22グローバルシリーズ eJリーグ powered by plala
FUTチャンピオンカップ (2021年12月25日～2022年1月30日)



FUJIFILM SUPER CUP 2022 (優勝: 浦和レッズ) (2月12日)



2022 明治安田生命 Jリーグ開幕 (2月18日)
2022 JリーグYBCルヴァンカップ開幕 (2月23日)



2022年度定時社員総会及び第2回臨時理事会後記者会見 (3月15日)



Jリーグアウォーズ (12月) ※写真は2021シーズン



Jリーグが取り組む各種事業

Jリーグはプロサッカーリーグを運営する一方で、Jリーグの理念を実現するために多岐にわたる事業・活動を行っています。

日本サッカーの頂点に立つプロサッカーリーグの運営。日本サッカーをより強くし、スポーツとしての魅力を高めるための選手育成や指導者養成活動。Jクラブが地域に根差したスポーツクラブとなるためのスポーツ振興をはじめとした様々な活動。Jリーグが安定的に活動を継続するための経営基盤の確立や、より多くの方にJリーグに関心を持っていただくための活動。そして、日本で初めて「ホームタウン」を持つプロスポーツとして、地域社会の活性化を促し、地域社会の課題をJリーグやスポーツというリソースを使って解決する社会連携活動。JリーグはJクラブと手を携えながら、中期、長期で目標を定め、リーグ運営と事業の推進に取り組んできました。これらの活動は、Jリーグ創設から約30年の間に確実に実を結び、全国各地に広がるJクラブのホームタウンでは、理念の具現化が進んでいます。

今年、Jリーグは1993年の開幕から30年目を迎えます。節目となるシーズン。Jリーグの原点であるフットボールの魅力を高め、世界に伍するプロサッカーリーグを目指し、さらなる理念の具現化に取り組んでいきます。



フットボール

■日本サッカーの頂点としてのリーグ運営

Jリーグは、日本サッカーの頂点に立つプロリーグとして、高い水準で安定した試合開催をするための環境を整備し、Jクラブや、自治体、パートナー等のステークホルダー、日本サッカー協会を中心とした各地域のサッカー協会等、関係各所の協力を得て、試合を開催しています。

スタジアムが安全であることは観客への最大のサービスとなるという理念のもとで試合運営を行い、試合以外の楽しみも数多く提供しています。Jリーグの試合を行うスタジアムが、子どもから大人まで、性別を問わず、全ての方々に楽しんでいただけるエンターテインメント空間として全国各地に存在していることは、Jリーグの大きな誇りです。

2020年から続く新型コロナウイルス感染症の流行にともない、Jリーグは「Jリーグ 新型コロナウイルス感染症対応ガイドライン」を策定しました。専門家の協力を得て、プロ野球をはじめとした他のスポーツ団体等とも連携しながら、感染症予防を前提にしたリーグ運営、試合運営を行っています。約2年間で蓄積した感染症対策のノウハウを活かしながら、安心して訪れることができる試合運営に取り組んでいます。

また、ピッチ上で魅せるフットボールそのものの質を高めることも不可欠です。競技レベルが高いことはもちろん、フェアでアグレッシブなプレーが展開されていること。競技力の向上や、クラブの哲学を体現するフットボールを展開し、ホームタウンに愛されるチームになること。これらを実現するために、自クラブで育った選手（ホームグロウン）の起用を促す制度を制定し、外国籍選手の登録者数の改定や、明治安田生命J1リーグでのビデオ・アシスタント・レフェリー（VAR）の導入など、競技の質の向上にも取り組んでいます。



■世界で最も人が育つリーグに

サッカーの質を向上するためには、優れた選手や指導者を恒常的に輩出すること。さらにそのための環境を整えることは大切です。

Jリーグは、目指す姿として、「Jリーグに世界的な選手を輩出するグレートアカデミーがある」「日本型人材育成システムで世界の5大リーグに名を連ねる」と定め、近年フットボール事業に取り組み、「世界で最も人が育つリーグ」を合言葉に、選手育成環境の向上からトップの強化まで、育成と強化のサイクルを循環させる施策を実践しています。

育成面では2019年より「プロジェクトDNA」を始動。選手育成にかかわる人材の養成、クラブの長期的な育成環境の整備を促すアカデミー認定制度の開発、選手がキャリアを通じて学び続けられる環境の整備、クラブの育成理念を明確化し、実際の育成活動へ反映させていくことなどに取り組んでいます。

2022年、Jクラブのアカデミー組織が段階的にステップアップするために開設した新しい認定制度「Jリーグアカデミックオリティースタンド（J.LEAGUE Academy Quality Standards、略称JAQS:ジャックス）」初の認定を行い、4つのクラブ（山形、長野、今治、琉球）のアカデミーへの1つ星付与を決定しました。

また、2021年から育成年代の大会を再編し、Jエリートリーグの開催や、Jユースカップをリーグ戦にリニューアルするなど、若手選手の試合機会、成長機会の創出にも取り組んでいます。

Jリーグフットボールビジョン ～世界で最も人が育つリーグへ～

- 世界的な競技水準になっている
- 全クラブが地に根差した個性的なクラブフィロソフィーをもっている
- 日本型のフットボール人材育成システムで、世界最高水準の選手・指導者・スタッフを輩出している
- 世界各国を代表する選手・指導者・レフェリーが活躍している
- 1試合も欠くことなく安全・安心・確実にフェアな試合を提供している
- 年齢・性別・障がい・人種などに関わりなく、だれもが、いつでも、どこでもスポーツを楽しんでいる

〈プロジェクトDNAとは〉



2019年よりスタートした育成の重点施策を実施するプロジェクトです。

「選手や指導者が本来持っているさまざまな資質を紡ぐ」というコンセプト

「Developing Natural Abilities」の頭文字をとって「プロジェクトDNA」と名付けています。

このプロジェクトを通じて、進化し続ける世界のサッカーに見合った指導者や選手を育成することを目的とし、日本独自の文化や環境を十分に考慮して日本人のDNAとして受け継がれるアイデンティティをベースに日本型人材育成システムの確立に向けて取り組んでいます。



試合機会創出の一環として、FUJIFILM SUPER CUP 2022の前に、「NEXT GENERATION MATCH（川崎フロンターレU-18 vs. 日本高校サッカー選抜）」が行われた。（2022年2月12日）

エンターテインメント（ファンづくり）

■地域のシンボル・インフラとして進化するスタジアム

Jリーグのエンターテインメントとしての源泉は熱狂のスタジアムです。競技のみならず、誰もが安心して楽しめるスタジアムの観戦環境を整備し、試合日には様々なイベントやグルメなど、試合以外の楽しみも得られる、非日常空間を演出しています。

試合ごとに人々が集まるスタジアムは、1993年のJリーグ開幕から30年。2002年のFIFAワールドカップの日本・韓国共催から20年が経過した今でも、新たなスタジアム型の街中スタジアムの建設され、ホームタウンのシンボルとして地域に根付いています。

スタジアムはエンターテインメント空間だけではなく、様々な機能を持つ施設としても進化しています。

試合日以外にも人々が集まる憩いの場として、スポーツジムや医療施設など、地域に必要な設備や防災拠点としての機能を持つスタジアムも現れ、街のインフラの役割を果たしています。

また、1年365日稼働する複合型の街中スタジアムの建設が計画されている地域もあり、Jリーグ黎明期は夢だった地域にスポーツ文化が根差している姿がより具体的に実現しつつあります。

Jクラブの資格要件として定めるクラブライセンス制度には、「施設要件」としてスタジアムに関する様々な要件が定められているため、Jリーグでは、資格を満たしたより良いスタジアム環境の整備、新スタジアム建設におけるサポートを行っています。また、地域に根差した街中スタジアムを中心としたスポーツエンターテインメントの発展を目的に、首都東京の中心である23区内にフットボール専用スタジアム建設を推進するプロジェクトも進行しています。



■いつでもどこでもJリーグを楽しめる

非日常空間を味わえるスタジアムがある一方で、場所や時間、環境を問わずJリーグを楽しむことができる取り組みを推進しています。

2017年より、スポーツ専門ライブストリーミングサービスDAZNでの試合映像の配信が始まり、いつでも、どこでもJリーグを楽しむことができる環境が整いました。

試合を見るだけでなく、ショートクリップ動画の展開や様々なSNSでの情報発信、エンターテインメントコンテンツや、他ジャンルとのコラボレーション企画など、試合以外にも楽しめるコンテンツの配信を促進しています。

2022シーズンからは、写真や動画をファン・サポーターやお客様がSNSに投稿できるように新たなルールを設けました。リーグやクラブ、ファン・サポーターの双方から情報が発信されることによる露出の拡大やコミュニティの活性化が期待されます。



■より良いサービスの提供へ

Jリーグが生活の一部になり、スタジアム観戦が日常化しているファン・サポーター。サッカー経験があるなど、Jリーグやサッカー全般に関心を持っている方。ホームタウンに住み、Jクラブが身近にある方。Jリーグやスポーツにはあまり関心がないけれど、家族や仲間と一緒に楽しむ時間を大切にしている方。様々な接点でJリーグに関わる方々が、58のJクラブを中心に全国各地、今ではアジアを中心に海外にまで広がっています。

こうしたJリーグに接点を持つ方々のことは、これまで各クラブが個別に把握し、コミュニケーションを図っていましたが、Jリーグでは2017年よりパートナー企業の協力を得て、チケット販売、ECサイト、公式アプリ（CLUB J.LEAGUE）などのマーケティングプラットフォームを徐々に構築し、「JリーグID」というクラブやプラットフォームを横断して活用できる共通IDを設定しています。「JリーグID」を取得している方を中心に、パーソナライズ（一人一人にあわせたおもてなし）を実施してJリーグに関わる皆様の顧客体験の向上を図っています。

■マーケティング人材の育成

デジタルとリアルの双方の視点を併せもって、Jリーグに関わる方々により豊かなJリーグライフを届けるため、JリーグではJクラブ向けにマーケティング人材を育成する講座を開講しています。講座では、参加者の経験や担当年数などに応じてレベルに合わせた内容とし、長期的な視野に立って知識やスキルを身に付けています。こうした講座や、クラブ間のノウハウのシェアなどによって、デジタルプラットフォーム、データベースをより有効活用し、マーケティング活動を推進しています。



事業強化

■日本に新たなスポーツビジネスの礎を築く

スポーツエンターテインメントを展開し、新たな価値を生み出し続けるには、強固な事業基盤を持つことは欠かすことができません。プロスポーツリーグとして確固たる地盤を築くには、スポーツをビジネスとして確立させ、安定的な財源の確保と事業を継続して推進し続ける必要があります。

スポーツビジネスにおける入場料収入以外の主要な収益事業は、協賛、放映、商品化等プロパティビジネスです。Jリーグは国内のプロスポーツで初めてリーグ一括型の事業構造を打ち出して、リーグとクラブの収入の最大化を図り、Jリーグやスポーツを取り巻く環境に応じて変化に対応しながら、全国各地にJクラブを展開するまでに成長しました。

■理念の具現化を後押しするパートナーシップ

企業からの協賛を得る「スポンサーシップ」はスポーツビジネスの主要な収益の柱のひとつです。JリーグやJクラブに価値を見出し、理念に賛同し、協賛いただく企業が増えているほか、現在は様々な協業や複数の企業や団体と社会課題を解決する、社会連携活動も行っています。

これまで支えられる存在だった「スポンサー」に対し、リーグやクラブのリソースを活用して、共同で企業の課題を解決するなど、「スポンサーシップ」は「パートナーシップ」に進化しています。

■Jリーグの「観る」を広げる放映

プロスポーツとして、テレビ、ラジオ、インターネット配信などによる試合放映は、多くの方々の接点となる重要なメディアです。同時に、放映権（公衆送信権）料は収益の重要な核となっています。

そのため、Jリーグ公式試合のテレビ・ラジオ放送、インターネット配信等の公衆送信権はJリーグに帰属し、公衆送信権の取り扱いもJリーグが定めています。

Jリーグ開幕以降、できる限り全ての試合を生放送し、Jリーグの露出を最大化するために、視聴環境の変化に合わせて地上波放送、BS放送、CS放送等での放送を展開してきました。こうした公衆送信権を一括管理し、Jリーグの事業活動やクラブの配分金等の原資としています。

2017年には世界で初めてスポーツ専門ライブストリーミングサービスを提供するDAZNと放映権契約を締結し、スマートフォンをはじめとするデジタルデバイスでいつでもどこでもJリーグの試合を視聴で

きる環境が促進されました。テレビに加え、インターネット回線を通じた配信OTT（Over the Top）サービスにより、様々な視聴者層に合わせた、Jリーグの試合の展開が実現しました。

また、国内のみならず海外での放映も広がっています。チャナティップ選手（川崎フロンターレ/タイ）をはじめとする、外国籍選手の出身国・地域を中心に、海外での放映も広がり、2022シーズンは58の国と地域でJリーグの試合が放映されています。

■可能性を広げる「Jリーグ公式映像」と素材の展開

2017年より、DAZNでの配信を主な用途とする「Jリーグ公式映像」の制作を開始しました。現在、多くのスポーツ競技では放送局が著作権を持ってテレビ等で試合を放映しますが、Jリーグ公式映像はJリーグが著作権を持って制作しています。これによって、DAZNでの配信のほか、ローカル放送局への中継映像販売、ショートクリップ動画のSNSでの活用を通じたプロモーション活動、チームの強化や審判員育成のための活用など、様々な用途で映像を活用できるようになりました。また、映像制作技術と映像管理のノウハウを生かし、WEリーグやプロバスケットボールリーグBリーグなど他競技の公式映像制作、映像の管理、販売業務も行っています。

また、写真、映像などの著作物を迅速に展開するデジタルプラットフォームを設計し、リーグ・クラブ関係者以外にも、放送局などの報道利用に活用されています。

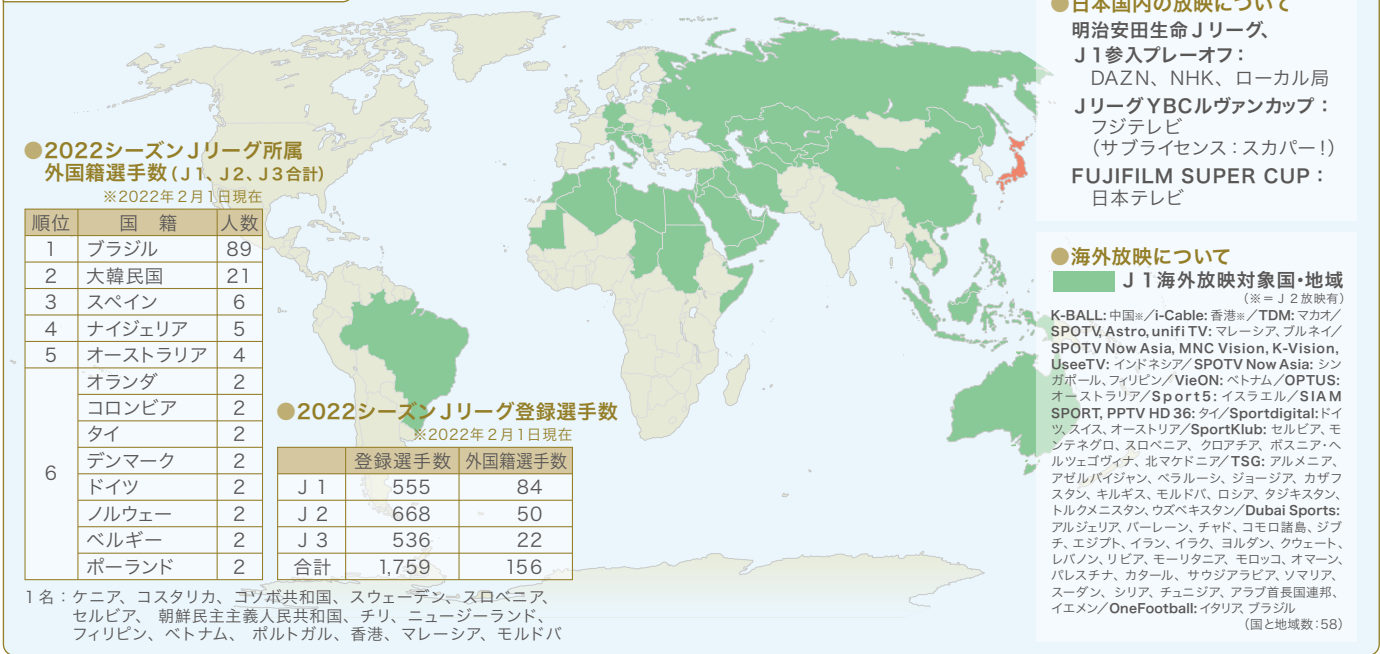
■ブランドマネジメントとプロパティビジネス

選手の肖像や試合映像、写真をはじめとする著作物。JリーグやJクラブの名称や、価値を表すロゴやエンブレム、マスコット、フラッグなどの意匠。試合記録やJリーグに関連して蓄積された各種データ。これらはプロスポーツにおける重要な商材となり、この権利を扱うビジネスは、プロスポーツにおける主要な事業の一つです。

とくに、意匠・商標はアイデンティティの象徴であると同時に、世の中にJリーグ・Jクラブを認識させる重要なコミュニケーションツールです。そのため、Jリーグ・Jクラブは市場における保護と、市場価値の向上を目的に、ブランドマネジメントの一環としてプロパティを管理運用しています。

プロパティが使われたグッズなどの商品、ゲームやトレーディングカードなどの肖像などのプロパティを活用したエンターテインメントコンテンツは日常生活の中でJリーグに親しむ機会を提供しています。

Jリーグと世界とのつながり



経営基盤

■「3つのフェアプレー」の推進

Jリーグはフェアプレーの精神を重んじ、常にフェアでクリーンな試合をご覧くださいよう努めています。アグレッシブでクリーンな、またスポーツインテグリティを重視したピッチ上のフェアプレーのみならず、リーグ、クラブの健全経営化に取り組むファイナンシャル・フェアプレー、ソーシャル・フェアプレーといったピッチの外のフェアプレーを重視しています。

ファイナンシャル・フェアプレーとして、Jリーグは、多くの方々に愛されるプロスポーツとして、健全なリーグ、クラブ経営を行うための基盤、制度を整えています。Jリーグ、Jクラブ経営の透明化を図るため、1999年よりクラブ経営情報を開示し、2012年度にはクラブライセンス制度を導入。クラブの資格要件として財務基準を設け、経営基盤の安定化を図っています。リーグ・クラブ経営の健全性を示すことは、地域の公共財としての役割を果たすだけでなく、自治体や企業などの協力や投資を得るために、ステークホルダーの信頼を裏付ける要素にもなっています。

また、ソーシャル・フェアプレーとして、コンプライアンスの運用、「暴力団等排除宣言」の実施に伴う反社会的勢力との関係遮断、差別の根絶などにも取り組んでいます。コンプライアンスにおいては、Jリーグ、Jクラブに「コンプライアンス・オフィサー」を配置し、競技、事業の執行、経営などの各分野における有事対応の体制構築や、コンプライアンス規程の制定、研修会の開催などを行っています。

「3つのフェアプレー」が、JリーグやJクラブが公共財としての社会的責任を果たし、自らを発展させる基盤となる重要な概念であることに合意し、これを積極的に推進しています。

■クラブライセンス制度

Jリーグは、アジアサッカー連盟（以下「AFC」という）の定めるAFCクラブライセンス交付規則の定めに基づき、公益財団法人日本サッカー協会（JFA）から日本におけるクラブライセンス制度の制定および運用の委任を受けました。これにより、日本におけるクラブライセンス交付機関（ライセンサー）として、日本におけるクラブライセンス制度の制定および運用を行っています。

クラブライセンス制度導入の目的は大きく分けて「サッカーの競技水準や施設の水準の持続的な向上」「クラブの経営安定化、財務能力・信頼性の向上」に集約され、サッカーがより魅力的で、観客やパートナーなどのステークホルダーに信頼されるスポーツを目指すことが示されています。

Jリーグに参加を希望するクラブは定められた基準を充足した「クラブライセンス」の交付を受ける必要があり、クラブライセンスは、J1・J2・J3それぞれのライセンス制度を設定しています。

J1クラブライセンスの交付を受けるための審査は、アジアサッカー連盟（AFC）が各国に提示している制度概要にJリーグが必要な修正を加えた「Jリーグクラブライセンス交付規則」に基づいて実施され、インターナショナルライセンスとして位置づけられます。

J2、J3クラブライセンスの審査は、「Jリーグクラブライセンス交付規則」と連動しているものではなく、Jリーグが独自に制定し、J2またはJ3クラブライセンス交付規則に基づいて行われます。

2021年度までは、J2ライセンスもJ1と同様にACLの出場要件を満たすインターナショナルライセンスとしていましたが、2022年度より国内独自のライセンスとして運用することに改訂しました。

これによって、Jクラブは各クラブの実態に合わせたライセンスを取得するなど、これまでより柔軟にクラブライセンス制度を運用できる仕組みとなっています。

〈主な要件〉

1 競技基準	育成部門の整備や選手との契約締結義務など
2 施設基準	スタジアム、練習場の確保やそれらのスペックなど
3 人事体制・組織運営基準	部門別担当者の配置など
4 法務基準	競技規則、Jリーグ規約の順守義務など
5 財務基準	適法かつ適正な決算及び監査の実施など

〈ライセンスの対象〉

J1クラブライセンス：J1・J2・J3リーグいずれにも参加可能

J2クラブライセンス：J2・J3リーグに参加可能

J3クラブライセンス：J3リーグのみに参加可能

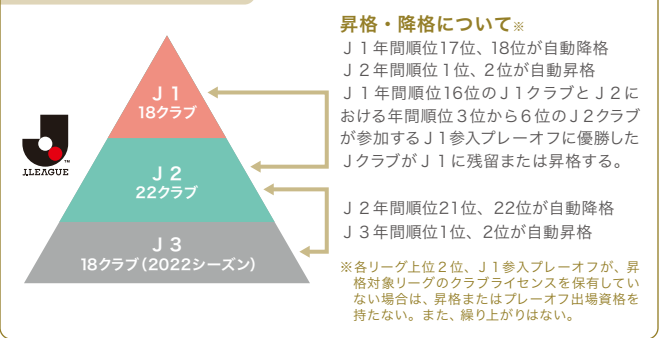
※J1・J2・J3クラブはいずれのクラブライセンスにも申請可能。

※Jリーグ百年構想クラブはJ3クラブライセンスのみ申請可能

〈2022シーズン クラブライセンス交付判定〉

J1 (45)	札幌・仙台・秋田・山形・鹿島・水戸・栃木・群馬・浦和・大宮・千葉・柏・F C東京・東京V・町田・川崎F・横浜F M・横浜F C・湘南・甲府・松本・新潟・富山・金沢・清水・磐田・名古屋・岐阜・京都・G大阪・C大阪・神戸・岡山・広島・山口・徳島・愛媛・福岡・北九州・鳥栖・長崎・熊本・大分・鹿児島・琉球
J2 (9)	八戸・岩手・Y S横浜・相模原・長野・藤枝・鳥取・讃岐・今治
J3 (9)	福島、いわき、沼津、今治、宮崎 Jリーグ百年構想クラブ：青森、三重、奈良、F C大阪（鈴鹿は解除条件付き資格停止中）

昇格・降格について



■経営を担う人材の育成

Jリーグは、Jクラブやスポーツ団体などの経営を担う人材を育成する活動「Jリーグヒューマンキャピタル」を独立した法人とし、2016年9月に「一般社団法人スポーツヒューマンキャピタル（SHC）」を設立しました。

SHCでは、フットボールだけでなく、日本国内の様々なスポーツ関連組織の経営を担う人材の開発と育成を行っています。2021年までにスポーツビジネスマスターコースを計13期実施、卒業生389名を輩出し、87名がスポーツ業界、そのうち63名がJクラブへ転身しています。



社会連携

■社会連携活動 ～スポーツが持つ「つなげる力」を信じて。

ホームタウンを持つプロスポーツクラブとして、地域社会の一員であり続けること。そのために、Jクラブはホームタウンの皆様と一緒に積極的な活動を行ってきました。

地域の一員として始めた活動は、サッカーやスポーツを通じて街を活性化させること、「ホーム」となるスタジアムやクラブの施設を街の「機能」として活用すること、子ども達の勉強や学び、地域産業の発展に対して、共に取り組む活動にまで発展しています。その活動はJクラブだけが行うのではなく、自治体や地域の企業、団体などが、それぞれの得意分野や機能、リソースを出し合って、クラブと協働しています。

スポーツには、人と人や、スポーツ以外の何かと何かをつなげる力がある。こうした可能性を広げるために今後も活動が続けていきます。

■SDGsにつながるホームタウン活動

「ホームタウン活動」は、2021年には全クラブ合計で21,782もの活動が行われています。これらの活動を紐解くと、人々が健康になるための取り組みや、資源や環境問題対策など、地域社会が抱える課題に向き合うきっかけや課題解決につながる活動もあります。

その中には、2015年に国連が「持続可能な開発目標（SDGs）」を中核とする「持続可能な開発のための2030」アジェンダに含まれるものもあり、Jリーグ、Jクラブの取り組みがSDGsの観点から注目を集めています。

■Jリーグの社会連携活動「シャレン！」

社会課題や共通のテーマ（教育、ダイバーシティ、まちづくり、健康、世代間交流など）に地域の人・企業や団体（営利・非営利問わず）・自治体・学校などとJリーグ・Jクラブが連携して取り組む社会連携活動を「シャレン！」と称して2018年より本格的に取り組んでいます。

「シャレン！」活動は、三者以上の協働者と、地域にある課題解決に向けて共通価値を創る活動と定義しており、地域社会の持続可能性の確保、関係性の構築と学びの獲得により、活動に関わる企業や団体の価値の再発見にもつながると考えています。

Jリーグは、「シャレン！」活動について、たくさんの方々が関心を持ち、一緒に考えていくために、専用のホームページで、社会をよくするアイデアを募集しています。

<https://www.jleague.jp/sharen/>

■Jリーグ シャレン！アウォーズ

全クラブの社会連携（シャレン！）活動の中から、特に社会に共有したい活動を表彰する「Jリーグ シャレン！アウォーズ」を2020年から開催しています。2022シーズンも継続してアウォーズを行い、各クラブの活動を広く社会に発信・共有していきます。

2022 Jリーグ シャレン！アウォーズについてはこちら→



〈2022 Jリーグシャレン！アウォーズ 受賞活動〉

●ソーシャル・チャンジャー賞



【いわてグルージャ盛岡】ゴミで繋ぐ未来へのパス、グルージャごみゼロPJ



【FC琉球】FC琉球 県産品&子ども応援プロジェクト

●パブリック賞



【松本山雅F C】スタジアムトイレに生理用品の設置と生理への理解



【ヴィッセル神戸】神戸市新型コロナワクチン接種会場の運営協力活動

●メディア賞



【カターレ富山】Be supporters！サポーターになろう！



【ガイナレ鳥取】サッカーだけじゃない、地域で共創する夜のスタジアム

■スポーツ振興活動 ～スポーツで、もっと、幸せな国へ。～

Jリーグ設立から約20年後の2011年8月に、スポーツ推進のための基本的な法律として「スポーツ基本法」が成立され、約10年の歳月が経過しました。Jリーグがスポーツ基本法の成立に先駆けて、開幕から3年後の1996年に「Jリーグ百年構想」を掲げ、スポーツ振興活動に本格的に取り組み始めてから、四半世紀が過ぎています。活動の中で、サッカーのみならず様々なスポーツ振興に取り組み、10年、20年を超える活動によって、トッププロスポーツチームとしての活躍や、日本を代表して世界で活躍する選手を輩出するなど、その活動は確実に成果を上げています。

また、スポーツを「する」だけでなく、「観る」ことや、大会運営、チームのサポート、ボランティアなどを通じて「支える」といった方法で、スポーツに参加する方が年々増えています。2021年の東京オリンピック・パラリンピックでは、Jリーグや地域スポーツへのかかわりをきっかけに、多くの方が大会に参加し、日本全国にスポーツにかかわることの価値を伝えました。

このように、Jリーグは歩みを止めることなく日々進化し、これからも日本のスポーツ振興の旗振り役として活動していきます。



Jリーグの沿革

1988年 3月	日本サッカーリーグ（JSL）が第1次活性化委員会設置
10月	第2次活性化委員会
1989年 3月	JSLが、日本サッカー協会（JFA）に「日本サッカーリーグの活性化案」提案
6月	JFAが「プロリーグ準備検討委員会」設置
10月	プロリーグへの参加条件を立案
1990年 3月	プロリーグ参加条件決定
6月	20団体より参加希望の回答あり
8月	プロリーグ検討委員会（91年1月まで6回開催）
1991年 1月30日	「プロサッカーリーグ設立の経緯について」報道発表
2月14日	「プロサッカーリーグ参加団体（10団体）」発表
3月 1日	「プロリーグ設立準備室」開設（室長：川淵三郎・現JFA相談役）
7月 1日	プロリーグ正式名称「(株)日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）」、Jリーグロゴマーク発表
11月 1日	「社団法人 日本プロサッカーリーグ」設立 川淵三郎が初代チェアマンに就任
1992年 3月 6日	選手登録、移籍規定改定と「プロ選手統一契約書」を発表
5月	「Jリーグ・プレスプレビュー」開催。10クラブのプロフィール、ユニフォームなどJリーグの全容を発表
9月	Jリーグ初の公式試合「'92 Jリーグヤマザキナビスコカップ」開催。優勝：ヴェルディ川崎
1993年 3月	ジェイ・エス・エル商事(株)から「(株)Jリーグエンタープライズ」に社名変更
4月 1日	Jリーグ規約施行
4月	「Jリーグ映像(株)」設立
4～5月	日本代表がFIFAワールドカップアメリカ'94アジア地区1次予選を突破
5月	初の外国人審判員マーチン・ボデナム氏（イングランド）招へい
5月15日	Jリーグ開幕 プロサッカーとして初のリーグ戦「'93 Jリーグサントリーシリーズ」がスタート
7月	Jリーグ初のオールスターサッカー「'93 JリーグKodakオールスターサッカー」（神戸ユニバー記念競技場）開催
10月	FIFAワールドカップアメリカ'94アジア地区最終予選敗退
12月	「Jリーグフォト(株)」設立
1994年	ベルマーレ平塚、ジュビロ磐田が新加入／12クラブ
3月	「延長サンドես方式」を「Vゴール」に名称変更
10月	「スポーツターフ研究会」発足
1995年	柏レイソル、セレッソ大阪が新加入／14クラブ
8月	横浜フリューゲルスがアジアスーパーカップ優勝
12月	「セキュリティ研究会」発足
1996年	京都パープルサンガ、アビスパ福岡が新加入／16クラブ
3月	「Jリーグ百年構想」をキーワードにした、プロモーション展開発表
5月	「(株)日本フットボールヴィレージ（Jヴィレッジ）」設立
1997年	ヴィッセル神戸が新加入／17クラブ
1998年	コンサドーレ札幌が新加入／18クラブ FIFAワールドカップフランス'98に日本代表初出場



〔1991年1月30日〕「プロサッカーリーグ設立の経緯について」報道発表



〔1992年11月23日〕'92 Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝



〔1993年5月15日〕Jリーグ開幕



〔1996年3月〕「Jリーグ百年構想」をキーワードにしたプロモーション展開発表



〔1998年6月〕日本代表がFIFAワールドカップに初出場（フランス）

1999年 2月	横浜マリノスと横浜フリューゲルスが合併 1・2部制開始 〈J1・16クラブ〉 鹿島アントラーズ、浦和レッズ、ジェフユナイテッド市原、柏レイソル、ヴェルディ川崎、横浜F・マリノス、ベルマーレ平塚、清水エスパルス、ジュビロ磐田、名古屋グランパスエイト、京都パープルサンガ、ガンバ大阪、セレッソ大阪、ヴィッセル神戸、サンフレッチェ広島、アビスパ福岡 〈J2・10クラブ〉 コンサドーレ札幌、ベガルタ仙台、モンテディオ山形、大宮アルディージャ、FC東京、川崎フロンターレ、ヴァンフォーレ甲府、アルビレックス新潟、サガン鳥栖、大分トリニータ
4月	ジュビロ磐田がアジアクラブ選手権優勝
6月	Jリーグゼネラルマネージャー（GM）講座が始まる
11月	ジュビロ磐田がアジアスーパーカップ優勝
2000年	水戸ホーリーホックがJ2に新加入 J1・16クラブ、J2・11クラブ
2001年	横浜FCがJ2に新加入／J1・16クラブ、J2・12クラブ
2002年	2002 FIFAワールドカップを日本と韓国が共同開催 「Jリーグ・アカデミー」発足 「Jリーグキャリアサポートセンター」発足 JFAが「スペシャルレフェリー（SR）」制度導入。岡田正義氏、上川徹氏の2人が初代SRに
7月	鈴木 昌が第2代 Jリーグチェアマンに就任
2003年 3月	日本・中国・韓国の3カ国のリーグチャンピオンなどが競う「A3チャンピオンズカップ」が始まる 延長戦（Vゴール）が廃止となる
9月	東京都文京区本郷に「JFAハウス」完成 JFA、Jリーグ、各種サッカー関係団体が一堂に集まる
2005年	J1が2ステージ制から1ステージ制へ ザスパ草津、徳島ヴォルティスがJ2に新加入 J1・18クラブ、J2・12クラブ
2006年	愛媛FCがJ2に新加入／J1・18クラブ、J2・13クラブ
3月	Jリーグ準加盟制度発足
6月	2006 FIFAワールドカップドイツに日本代表出場
7月	鬼武 健二が第3代 Jリーグチェアマンに就任
2007年 4月	Jリーグ U-13が始まる
11月	浦和レッズがAFCチャンピオンズリーグ優勝
12月	FIFAクラブワールドカップに浦和レッズが出場（3位）
2008年	ロアッソ熊本、FC岐阜がJ2に新加入 J1・18クラブ、J2・15クラブ Jリーグ U-14が始まる Jリーグ映像(株)から「(株)Jリーグメディアプロモーション」に社名変更
11月	ガンバ大阪がAFCチャンピオンズリーグ優勝
12月	FIFAクラブワールドカップにガンバ大阪が出場（3位）
2009年	栃木SC、カタレ富山、ファジアーノ岡山がJ2に新加入 J1・18クラブ、J2・18クラブ アジアサッカー連盟加盟国の選手登録枠（アジア枠）を導入
3月	Jリーグ公式試合通算入場者数が1億人を突破
12月	鹿島アントラーズが史上初のJ1リーグ戦3連覇を達成
2010年	ギラヴァンツ北九州がJ2に新加入 J1・18クラブ、J2・19クラブ
6月	2010 FIFAワールドカップ南アフリカに日本代表出場
7月	大東 和美が第4代 Jリーグチェアマンに就任



〔1999年〕1・2部制開始



〔2002年〕FIFAワールドカップ 日韓共催



〔2002年〕Jリーグアカデミー発足
※写真はJリーグU-13



〔2007年〕浦和レッズがAFCチャンピオンズリーグに「クラブとして初優勝



〔2008年〕ガンバ大阪がAFCチャンピオンズリーグで優勝



〔2009年〕Jリーグ公式試合通算入場者数が1億人を突破



鹿島アントラーズが史上初のリーグ戦三連覇を達成

2011年	ガイナレ鳥取がJ2に新加入 J1・18クラブ、J2・20クラブ
3月	東日本大震災発生（3/11）。 4月23日まで公式試合の開催を中止
11月	FIFAクラブワールドカップに柏レイソルが出場（4位）
2012年	F C町田ゼルビア、松本山雅F CがJ2に新加入 J1・18クラブ、J2・22クラブ
2月	クラブライセンス制度導入
3月	20回目のJリーグ、Jリーグヤマザキナビスコカップ開催
4月	「公益社団法人 日本プロサッカーリーグ」へ移行
12月	FIFAクラブワールドカップにサンフレッチェ広島が出場（5位）
2013年	V・ファーレン長崎がJ2に新加入。F C町田ゼルビアがJFLに降格／J1・18クラブ、J2・22クラブ
12月	中村俊輔（横浜F・マリノス）が史上初となる2度目のJリーグ最優秀選手賞を受賞
2014年	カマタマーレ讃岐がJ2に新加入 明治安田生命 J3リーグがスタート グロージャ盛岡、ブラウブリッツ秋田、福島ユナイテッドF C、F C町田ゼルビア、Y. S. C. C. 横浜、S C相模原、AC長野パルセイロ、ツエーゲン金沢、藤枝MYFC、F C琉球がJ3に新加入／J1・18クラブ、J2・22クラブ、J3・11クラブ Jリーグ・アンダー-22選抜を創設、明治安田生命 J3リーグに参加 Jリーグ提携リーグの選手登録枠（提携国枠）を導入
1月	村井 満が第5代Jリーグチェアマンに就任 特任理事を新設
6月	2014 FIFAワールドカップブラジルに日本代表出場
2015年	レノファ山口F CがJ3に新加入／J1・18クラブ、J2・22クラブ、J3・12クラブ J1の大会方式を1ステージ制から2ステージ制およびチャンピオンシップに変更 J1・J2・J3リーグ戦を「明治安田生命 Jリーグ」として、チャンピオンシップを「明治安田生命 Jリーグチャンピオンシップ」として開催
5月	Jリーグヒューマンキャピタル開講
11月	大久保嘉人（川崎フロンターレ）が史上初となる3年連続3回目の得点王を獲得
12月	FIFAクラブワールドカップにサンフレッチェ広島が出場（3位）
2016年	鹿児島ユナイテッドF CがJ3に新加入／J1・18クラブ、J2・22クラブ、J3・13クラブ J1・J2クラブのU-23チーム（F C東京、ガンバ大阪、セレッソ大阪）がJ3リーグに参加 Jサテライトリーグを再開
6月	JリーグヤマザキナビスコカップがJリーグYBCルヴァンカップに名称を変更 明治安田生命 J3リーグとJリーグYBCルヴァンカップで追加副審を導入
9月	（一財）スポーツヒューマンキャピタルを設立
11月	Jリーグ設立25周年
12月	FIFAクラブワールドカップに鹿島アントラーズが出場（準優勝）
2017年	アスルククロ沼津がJ3に新加入／J1・18クラブ、J2・22クラブ、J3・14クラブ Jリーグ提携リーグの国籍を有する選手の登録数、エントリー数を日本人と同じ扱いに
1月	㈱Jリーグデジタル設立 2017 Jリーグ アジアチャレンジinタイを開催
2月	J1リーグが3年ぶりに1ステージ制で開幕
3月	25回目のリーグカップ戦（JリーグYBCルヴァンカップ）が開幕



〔2011年3月11日〕 東日本大震災発生。4月23日まで公式試合の開催を中止。
「TEAM AS ONE」をスローガンにした復興支援活動を実施



〔2014年〕 明治安田生命 J3リーグがスタート



〔2013年〕 中村俊輔（横浜FM／当時）が史上初となる2度目の最優秀選手賞を受賞



〔2015年〕 大久保嘉人（川崎F／当時）が史上初となる3年連続3回目の得点王を受賞



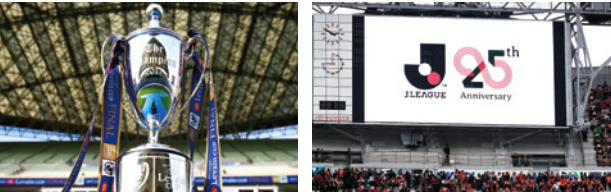
〔2016年〕 Jリーグ設立25周年（11月1日 歴代チェアマンによる記念撮影）



〔2016年〕 FIFAクラブワールドカップで鹿島アントラーズが準優勝

4月	㈱Jリーグホールディングス設立。関連会社を再編 ㈱Jリーグマーケティング設立 ㈱Jリーグエンタープライズ、Jリーグフォト㈱、 ㈱Jリーグデジタルエンタテインメント、 ㈱J ADVANCEが解散
7月	明治安田生命 Jリーグワールドチャレンジを開催（浦和レッズ vs ボルシア・ドルトムント／鹿島アントラーズ vs セビージャFC）
11月	浦和レッズがAFCチャンピオンズリーグ優勝
12月	FIFAクラブワールドカップに浦和レッズが出場（5位）
2018年5月	Jリーグ開幕25周年 eスポーツに参入。明治安田生命 eJ.LEAGUE開催
6月	2018 FIFAワールドカップロシアに日本代表出場
11月	鹿島アントラーズがAFCチャンピオンズリーグ優勝
12月	鹿島アントラーズがFIFAクラブワールドカップ出場（4位） 川崎フロンターレより3年連続でJリーグ最優秀選手賞選出。同一クラブからの3年連続は史上初
2019年	ヴァンラーレ八戸がJ3に新加入／J1・18クラブ、J2・22クラブ、J3・15クラブ ホームグロウン制度導入 外国籍選手の選手登録数制限を廃止。試合エントリー数、試合出場数の上限をJ1は5人、J2・J3は4人に変更 ルヴァンカッププライムステージとJ1参入プレーオフでビデオアシスタントレフェリー（VAR）導入を決定
12月	1シーズンのJリーグ公式試合入場者数総数が11,104,480人*となり初めて1,100万人を突破。J1は平均入場者数が初めて2万人を突破し、過去最高の20,751人に
2020年	F C今治がJ3に新加入／J1・18クラブ、J2・22クラブ、J3・16クラブ 明治安田生命 J1リーグでVAR導入。（6月27日の再開以降は導入を見送り。2021シーズンに再度導入。）
1月1日	株式会社Jリーグホールディングスが吸収合併継続会社とし、子会社である株式会社Jリーグデジタル、株式会社Jリーグメディアプロモーション、株式会社Jリーグマーケティングの3社を吸収合併消滅会社商号を「株式会社Jリーグ」に変更
2月	新型コロナウイルス感染症拡大のため、2月26日以降の公式試合を延期し、6月27日に再開
3月	日本野球機構（NPB）と新型コロナウイルス対策連絡会議創設 2020シーズンの明治安田生命 Jリーグの結果に伴う2021シーズンのJ2、J3への降格を廃止 F C東京U-23チームがリーグ戦再開後、明治安田生命 J3リーグへの参加を辞退
8月、9月	三浦知良選手（横浜F C）が、53歳でリーグカップ戦（8月5日）、J1リーグ（9月23日、12月19日）の最年長出場記録を更新 Jユースカップ、Jリーグインターナショナルユースカップなど育成組織の大会開催を中止
2021年	テゲバジャーロ宮崎がJ3に新加入／J1・20クラブ、J2・22クラブ、J3・15クラブ 明治安田生命 J3リーグへのU-23チーム参加を廃止
7月、8月	東京オリンピック開催
8月、9月	東京パラリンピック開催
2022年	いわきF CがJ3に新加入／J1・18クラブ、J2・22クラブ、J3・18クラブ
1月1日	株式会社Jリーグの事業を一部公益社団法人 日本プロサッカーリーグに移管。
2月	30回目のJリーグ（明治安田生命 Jリーグ）、リーグカップ戦（JリーグYBCルヴァンカップ）開催
3月15日	野々村 芳和が第6代Jリーグチェアマンに就任。 初のJリーグ選手出身チェアマンに

* AFCチャンピオンズリーグ含まず
※ クラブ名、大会名は当時のもの



〔2017年〕 25回目のリーグカップ戦（JリーグYBCルヴァンカップ）が開幕
〔2018年〕 Jリーグ開幕25周年



〔2017年〕 浦和レッズが2度目のACL制覇



〔2018年〕 鹿島アントラーズがACL初優勝



〔2018年〕 Jリーグがeスポーツに参入。明治安田生命 eJ.LEAGUEを開催



〔2019年〕 1シーズンのJリーグ公式試合入場者総数が初めて1,100万人を突破。
J1は初の平均2万人突破



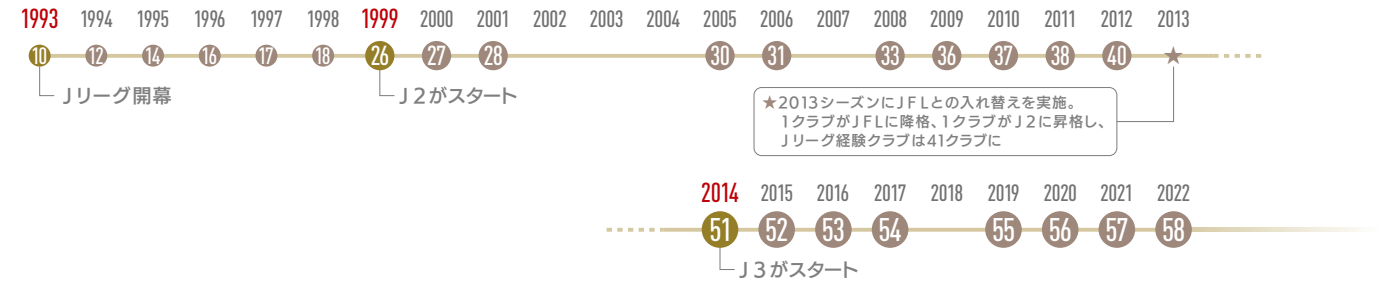
〔2020年〕 新型コロナウイルス感染症拡大のため、2月26日開催試合より6月27日まで公式試合を延期。6月27日よりリモートマッチで再開



〔2022年〕 30回目のシーズンが開幕

記録集

●クラブ数推移



●J1経験クラブ: 31クラブ ●J2経験クラブ: 47クラブ ●J3経験クラブ: 26クラブ ●Jクラブ所在都道府県: 40都道府県



●Jリーグチャンピオン経験クラブ: 10クラブ

●ステージ優経験クラブ: 7クラブ



●JリーグYBCルヴァンカップ※1

優勝経験クラブ: 15クラブ



●Jリーグチャンピオンまたは
JリーグYBCルヴァンカップ※1
優勝経験クラブ: 16クラブ

※2022シーズン開幕時 ※横浜フリューゲルス含む ※1: 旧Jリーグヤマザナビスコカップ

●J1通算出場記録(J1所属選手上位10位) 2022年4月29日現在

順位	通算順位	選手名	所属	通算出場
1	1	遠藤 保仁	磐田	651
2	6	西川 周作	浦和	532
3	13	興梠 慎三	札幌	464
4	18	青山 敏弘	広島	428
5	23	森重 真人	FC東京	418
6	25	槇野 智章	神戸	408
7	43	大谷 秀和	柏	380
8	45	家長 昭博	川崎F	374
9	54	西 大伍	札幌	359
10	60	倉田 秋	G大阪	354
	60	東口 順昭	G大阪	354

※J1通算出場ランキング[上位10位] ()内は最終所属
2位: 槇崎 正剛 631試合(名古屋) 7位: 小笠原 満男 525試合(広島)
3位: 中澤 佑二 593試合(横浜FM) 8位: 伊東 輝悦 517試合(沼津)
4位: 阿部 勇樹 590試合(浦和) 9位: 山田 暢久 501試合(浦和)
5位: 曾ヶ端 準 533試合(広島) 10位: 明神 智和 497試合(長野)

●J1監督勝利数ランキング ※=現所属 2022年4月29日現在

順位	監督名	最終所属※	試合数	勝利数	J1年間優勝
1	西野 朗	名古屋	524	270	2005 (G大阪)
2	長谷川 健太	名古屋※	487	220	
3	ペトロヴィッチ	札幌※	498	219	
4	ネルシーニョ	柏※	453	205	2011 (柏)
5	トニーニョ セレーゾ	広島	272	141	2000、2001 (広島)
6	鬼木 達	川崎F	184	118	2017、2018、2020、2021 (川崎F)
7	城福 浩	広島	316	116	
8	オズワルド オリヴェイラ	浦和	208	105	2007、2008、2009 (広島)
9	風間 八宏	名古屋	223	104	
10	ストイコビッチ	名古屋	204	103	2010 (名古屋)

●J1通算得点上位ランキング(J1所属選手上位5位) 2022年4月29日現在

順位	通算順位	選手名	最終所属	得点	シュート数	試合数
1	3	興梠 慎三	札幌	159	647	464
2	8	小林 悠	川崎F	130	664	326
3	14	遠藤 保仁	磐田	103	822	651
4	28	パトリック	G大阪	82	479	244
5	36	金崎 夢生	名古屋	71	629	335

※J1通算得点ランキング[上位5位] ()内は最終所属
1位: 大久保 嘉人 191得点(C大阪)
2位: 佐藤 寿人 161得点(千葉)
4位: 中山 雅史 157得点(沼津)
5位: 前田 遼一 154得点(岐阜)



遠藤保仁(磐田) 第1節の静岡ダービーで自身が持つJ1通算出場記録を更新



興梠慎三(札幌) 第2節のvs.広島にてJ1通算得点記録を更新

歴代優勝クラブ

	J1リーグ ※1	1stステージ ※2	2ndステージ ※2	ルヴァンカップ ※3	J2リーグ ※4	明治安田生命 J3リーグ
1992	——	——	——	ヴェルディ川崎	——	——
1993	ヴェルディ川崎	広島アントラーズ	ヴェルディ川崎	ヴェルディ川崎	——	——
1994	ヴェルディ川崎	サンフレッチェ広島	ヴェルディ川崎	ヴェルディ川崎	——	——
1995	横浜マリノス	横浜マリノス	ヴェルディ川崎	——	——	——
1996	広島アントラーズ	——	——	清水エスパルス	——	——
1997	ジュビロ磐田	広島アントラーズ	ジュビロ磐田	広島アントラーズ	——	——
1998	広島アントラーズ	ジュビロ磐田	広島アントラーズ	ジュビロ磐田	——	——
1999	ジュビロ磐田	ジュビロ磐田	清水エスパルス	柏レイソル	川崎フロンターレ	——
2000	広島アントラーズ	横浜F・マリノス	広島アントラーズ	広島アントラーズ	コンサドーレ札幌	——
2001	広島アントラーズ	ジュビロ磐田	広島アントラーズ	横浜F・マリノス	京都パープルサンガ	——
2002	ジュビロ磐田	ジュビロ磐田	ジュビロ磐田	広島アントラーズ	大分トリニータ	——
2003	横浜F・マリノス	横浜F・マリノス	横浜F・マリノス	浦和レッズ	アルビレックス新潟	——
2004	横浜F・マリノス	横浜F・マリノス	浦和レッズ	FC東京	川崎フロンターレ	——
2005	ガンバ大阪	——	——	ジェフユナイテッド千葉	京都パープルサンガ	——
2006	浦和レッズ	——	——	ジェフユナイテッド千葉	横浜FC	——
2007	広島アントラーズ	——	——	ガンバ大阪	コンサドーレ札幌	——
2008	広島アントラーズ	——	——	大分トリニータ	サンフレッチェ広島	——
2009	広島アントラーズ	——	——	FC東京	ベガルタ仙台	——
2010	名古屋グランパス	——	——	ジュビロ磐田	柏レイソル	——
2011	柏レイソル	——	——	広島アントラーズ	FC東京	——
2012	サンフレッチェ広島	——	——	広島アントラーズ	ヴァンフォーレ甲府	——
2013	サンフレッチェ広島	——	——	柏レイソル	ガンバ大阪	——
2014	ガンバ大阪	——	——	ガンバ大阪	湘南ベルマーレ	ツエーゲン金沢
2015	サンフレッチェ広島	浦和レッズ	サンフレッチェ広島	広島アントラーズ	大宮アルディージャ	レノファ山口FC
2016	広島アントラーズ	広島アントラーズ	浦和レッズ	浦和レッズ	北海道コンサドーレ札幌	大分トリニータ
2017	川崎フロンターレ	——	——	セレッソ大阪	湘南ベルマーレ	ブラウブリッツ秋田
2018	川崎フロンターレ	——	——	湘南ベルマーレ	松本山雅FC	FC琉球
2019	横浜F・マリノス	——	——	川崎フロンターレ	柏レイソル	ギラヴァンツ北九州
2020	川崎フロンターレ	——	——	FC東京	徳島ヴォルティス	ブラウブリッツ秋田
2021	川崎フロンターレ	——	——	名古屋グランパス	ジュビロ磐田	ロアッソ熊本

※1: 1998年までは1部制、2015年から明治安田生命J1リーグ ※2: 1995年まではそれぞれサントリーシリーズ、NICOSシリーズ
※3: 2016年6月21日よりヤマザナビスコカップから改称 ※4: 2015年から明治安田生命J2リーグ

■クラブのアジアタイトル

1994 アジアカップウィナーズカップ (横浜F) 1995 アジアカップウィナーズカップ (平塚) 1995 アジアスーパーカップ (横浜F) 1998 アジアカラブ選手権 (磐田)	1999 アジアスーパーカップ (磐田) 1999 アジアカップウィナーズカップ (清水) 2007 AFCチャンピオンズリーグ (浦和) 2008 AFCチャンピオンズリーグ (G大阪)	2017 AFCチャンピオンズリーグ (浦和) 2018 AFCチャンピオンズリーグ (広島)
---	---	--



2021明治安田生命J1リーグ チャンピオン [川崎フロンターレ]



2021JリーグYBCルヴァンカップ カップウィナー [名古屋グランパス]